

らくがく縄文館

— 縄文土器の **マナビ** を楽しむ —

講演会講演要旨



井野長割遺跡
(佐倉市教育委員会)



西広貝塚
(市原市教育委員会)



三直貝塚 (千葉県教育委員会)



2022年1月22日(土)

会場 **千葉県立中央博物館 講堂**

千葉県千葉市中央区青葉町955-2

ユルギ松遺跡(船橋市教育委員会)



財団Webページへ

【主催】(公財)千葉県教育振興財団 【共催】市立市川考古博物館・八千代市立郷土博物館・袖ヶ浦市郷土博物館

【後援】千葉県教育委員会・市川市教育委員会・八千代市教育委員会・袖ヶ浦市教育委員会

【問い合わせ】(公財)千葉県教育振興財団文化財センター ☎043-424-4850

※本事業は、令和3年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(「地域の特色ある埋蔵文化財活用」事業)の交付を受けて実施しています。

令和3年度出土遺物公開事業

らくがく縄文館—縄文土器のマナビを楽しむ—

日 時 令和4年1月22日（土） 10：30分～15：30分
場 所 千葉県立中央博物館 講堂

開催趣旨

縄文土器は、1万年以上の歴史の中で、実用性だけではなく、多様な文様、器形など、意匠を凝らし、造形美をも追求した器であることから、多くの人々を魅了し続けています。

また、縄文土器の多様なあり方は、年代観や地域性の指標になるとともに、集団関係・社会・交易などの研究課題への手がかりともなるのです。

今回は、学術や芸術、あるいはもっと自由な発想によって実践されている「縄文土器のマナビ」の一端を紹介します。縄文土器の魅力を様々な視点から楽しんでいただけると幸いです。

- | | | |
|-------------|----------------------------------|-----------------------|
| 10：30～10：40 | 開会挨拶 | 中村 敏行（公財）千葉県教育振興財団理事長 |
| 10：40～10：50 | 開催館挨拶 | 古泉 弘志 千葉県立中央博物館長 |
| 10：50～11：35 | 「縄文土器の美妙に魅せられて」 | 上守 秀明（公財）千葉県教育振興財団 |
| 11：35～12：20 | 「東日本と西日本の縄文土器の出会い」 | 加納 実（公財）千葉県教育振興財団 |
| 12：20～13：20 | 昼 食 | |
| 13：20～14：20 | 「土器破片が伝える土器製作事情-加曾利E式土器の成形について-」 | 戸村 正己 創作空間 縄文の丘 |
| 14：20～14：30 | 休 憩 | |
| 14：30～15：30 | 「異形土器の広域分布と地域間の交流」 | 西村 広経 松戸市立博物館 |

縄文土器の美妙に魅せられて

上 守 秀 明

はじめに

この数年、以前にも増して縄文土器をはじめとする縄文時代をテーマとした展示会が盛んに開催されています。私が観覧した展示会はこれらのほんの一部(表1)ですが、来館者が最終的には35万人以上となった「特別展 縄文 - 1万年の美の鼓動」(東京国立博物館：2018(平成30)年度)を筆頭に、注目される内容の展示会が開催されました。おそらく各年度に各地で企画された展示会を数え上げると、枚挙にいとまがないと思われます。

年度	展示タイトル	開催館
2018 (平成30)	特別展 縄文 - 1万年の美の鼓動	東京国立博物館
2020 (令和2)	Jomon Period - 縄文の美と技、成熟する社会 -	茨城県立歴史館
	ちばの縄文 - 貝塚からさぐる縄文人の暮らし -	千葉県立中央博物館
	かわる生活様式 - 船橋の縄文早期 -	飛ノ台史跡公園博物館
2021 (令和3)	縄文人の心に触れる - 柏の縄文土器 -	柏市郷土資料展示室
	らくがく縄文館 - 縄文土器のマナビを楽しむ -	市立市川歴史博物館・八千代市立郷土博物館・袖ヶ浦市郷土博物館
	ふなばしがいちばん暑かった時 - 縄文時代前期の地球温暖化 -	飛ノ台史跡公園博物館
	5000年前のモダンアート - 中期縄文土器の世界 -	上高津貝塚ふるさと歴史の広場
	特別展 縄文2021 - 東京に生きた縄文人 -	東京都江戸東京博物館
	全盛期の縄文土器 - 圧倒する褶曲文 -	長野県立歴史館

表1 関東地方近辺で開催された主な展示会 (2018年度～2021年度)

令和3年度出土遺物公開事業「らくがく縄文館 - 縄文土器のマナビを楽しむ-」は、多くの人々を魅了してやまない縄文土器について、その多様な文様や器形、意匠や彩色を凝らした造形美を紹介しながら、これらに関連する考古学的な知見に触れるとともに、道具としての土器のライフサイクルに関する研究、土器型式による時代の移り変わりや地域性・文化に関する研究など、縄文土器研究の一端を皆様にお伝えする展示として企画しました(図1)。

そして、展示内容をより興味深く見ていただけるよう、各開催館において講座を実施し、展示单元の一部を切り取り、深掘りしてお話してまいりました。今回の講演会においても、展示内容に関連した興味深い話を専門的な知見から3人の講師の方々にお話していただきます。また、土器のペーパークラフト作りを各開催館でワークショップとして行ったり、土器の拓本を封入した葉を作成し図録



図1 らくがく縄文館

に挟み込んだりして、展示タイトルにふさわしく縄文土器に親しみを持って接していただくための工夫も凝らしてきました(図2)。



図2 土器のペーパークラフトと拓本の葉

私は今回の講演会では展示の第1章「縄文土器の美妙」に

関連して、縄文土器に日本の伝統・美意識を見出し、その芸術的観点から縄文土器に接近して、後に縄文土器が多くの人々に注目されるようになったきっかけを作った岡本太郎さん(以下、敬称略)の功績を先ずお話ししてみます。次いで、縄文時代の魅力を発信し続けているフリーペーパー「縄文ZINE」についても紹介したいと思います。

1 岡本太郎と縄文の美

(1) 縄文の美との出会い以前

岡本太郎(1911(明治44)～1996(平成8)年)は、20世紀代に幅広い表現領域で数々の業績を残した芸術家です。一般には、1970(昭和45)年に大阪で行われた日本万国博覧会の高さ70mの巨大モニュメント「太陽の塔」の制作者として、また、テレビ番組などに出演して発した「芸術は爆発だ!」・「何だ、これは!」という流行語の表現者としてよく知られています(図3)。岡本太郎と縄文の美との出会いについて記す前に、専門領域ではありませんが、参考資料の引用(註1)を手掛かりに縄文の美に出会う前の岡本の足跡、縄文の美に魅かれた必然について概略を触れておきたいと思います。



図3 岡本太郎

1929(昭和4)年、18歳の岡本は世界の芸術の中心であるパリに渡ります。やがてお定まりの遊学生活とは決別し、フランス社会で自立するためフランス語を学び、西洋の教養を身に付けていくという唯一無二の経験をしています。そして「純粹抽象」から「シュールレアリスム」へと、二つの前衛芸術運動をリアルタイムで体験します。1938(昭和13)年、パリ大学で哲学を学んでいた岡本はMUSEE DE L'HOMME(人類学博物館)を見て衝撃を受け、マルセル・モースのいる民族学科に移籍し、その学びから「芸術の無償性」や「芸術とは全人間的に生きること」を体得します。また、ジョルジュ・バタイユとの出会いを契機に、世界的な知性と親密な交友を結んでいます。この1930年代のパリでの経験が岡本芸術に通底する美意識である「自由」・「誇り」・「尊厳」を彼の肉体に刻んだとされます。

1940(昭和15)年、岡本は戦時下の日本に帰還した後に徴兵され、戦後の中国での収容所暮らしを経て帰国しますが、アトリエでもある自宅は空襲で焼け、パリ時代の作品は灰燼に帰し、ゼロからの出発を余儀なくされました。しかし、活動を再開した岡本は「絵画の石器時代は終わった」と宣言し、「鑑賞するだけの美術の時代は終わった」「西欧の芸術精神が獲得した自由の恩恵を受ける時代が来たのだ」と続け、長老中心の権威主義的な日本美術界に宣戦布告します。旧態のわび・さび的美学に支配されていたガラ

パゴス的美術界に強烈な原色を叩きつけるとともに、出版や講演などの啓蒙活動も積極的に開始して、「芸術とは何か」・「アヴァンギャルドとは何か」・「創造とは何か」など、挑発的な言動で社会に問題提起をしました。そして、これからのアヴァンギャルド芸術の精神には「非合理的なロマンティズムと、徹底した合理的な構想が、激しい対立のまま同在すべきである。この異質の混合や融和を私は考えない。二つの極を引き裂いたまま把握する」という「対極主義」と名付けた芸術思想により、次々と問題作や大作を世に送り出し、アヴァンギャルドのリーダーとして美術界に旋風を巻き起こしました。

(2) 縄文の美との出会い

戦後の精力的な芸術文化活動のさなか、岡本は1951(昭和26)年11月7日の午後、東京国立博物館で開催されていた「日本古代文化展」を訪れました。展示は縄文時代から飛鳥時代までの考古資料が時代別・地域別に10室にわたって陳列されており、岡本はその第1室に並んでいた縄文土器に強い衝撃を受け、その内容を1952(昭和27)年2月発行の美術雑誌『みづゑ』第558号に「四次元との対話 縄文土器論」と題して発表しました(図4)。



図4 縄文土器論(『みづゑ』第558号)

「縄文土器の荒々しい、不協和な形態、紋様に心構えなしにふれると、だれでもドギツとする。なかんずく爛熟した中期の土器の凄まじさは言語を絶するのである。激しく追いかぶさり重なり合って、隆起し、下降し、旋廻する隆線紋、これでもかこれでもかと執拗に迫る緊張感、純粹に透った神経の鋭さ、常々芸術の本質として超自然的激超を主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄味である。」という冒頭の文章は、その時、岡本が縄文土器に感じたことを雄弁に物語っています。8頁にわたる岡本の論旨は芸術家としての観点のみならず、彼が学んだ哲学的、民族学的な視点や、考古学で縄文土器はどのように扱われているのかを学び思ったことなどに基づいています。

フランスから帰国して以来、ヨーロッパの非情で強靱な伝統に比して、自国の文化・伝統が卑弱で陰湿であると感じていた岡本。大陸から直輸入された雄輝壮大な奈良時代の仏教美術が、素朴な当時の日本にはそぐわない爛熟した大陸デカダンス文化の重く居丈高い気配に、後味の悪さを感じていた岡本。埴輪などの余りにも楽天的な美感、島国的安堵、現代日本人に通じる形式主義を看取り、絶望していた岡本。ところが、そんな岡本が縄文土器に一度触れると「私の血の中に力がふき起るのを覚えた。潤然と新しい伝統への視野がひらけ我が国の土壌の中にも掘り下げるべき文化の層が深みにひそんでいることを知ったのである。民族に対してのみではない。人間性への根本的な感動であり、信頼感であった」と記すように、通常考えられていた和やかで優美な日本の伝統とは全く反対で、その美の観念とは断絶のある縄文土器から「原始的な逞しさ、純粹さ、つまり人間に於ける根源的情熱を今日我々のものとして取り上げて、豪快、不敵な表情を持つ新しい伝統を打ち建つべき」という思いが沸き起こります。

そして「縄文式文化の超現代的日本的凄みに、ただ打たれているだけでは勿論意味はない。具体的に観察し、その深淵を究明して己のものとしなければならない。」と論じ、次のような指摘をします。先ず「縄文土器の最も大きな特徴を隆線紋は、激しく、鈍く、縦横に奔放に躍動して展開する。その線をたどっ

て行くと、もつれては解け、混沌に沈み、忽然と現れ、あらゆるアクシデントをくぐりに抜けて、無限に回帰して行く。…後略…」と言います。次に「異様な衝撃を感じさせるものは、形態全体の到底信じることのできないようなアシンメトリーである。それは破調であり、ダイナミズムである。…中略…一つのアシンメトリックな面を起点として、鑑賞者は必然的に土器の周囲をまわってみなければ済まない衝動を感じはじめる。ところで視点の移動につれて、なんとという想像を絶したイメージが繰り展げられるであろうか」と言います。ここで指摘した習慣的な審美感では絶対捉えることが出来ない力の躍動と強靱な均衡、非情なアシンメトリー(非対称)とその逞しい不協和のバランスこそ、自分たちが縄文土器に学ぶべき大きな課題であると岡本は確信します。

図5は岡本が東京国立博物館で実見し『みづゑ』で「縄文土器論」を論じる最もきっかけとなった縄文土器と思われます。この土器は長野県伊那市宮ノ前出土の曾利式に併行する梨久保B式(唐草文系土器)です。以下に「縄文土器論」でこの土器に対して書かれたと思われる観察所見を引用します。

「そびえ立つような隆起がある。鈍く、肉太に走る隆線紋をたどりながら視線を移して行くと、それがぎりぎりっと舞上がり、渦巻く。突然降下し、左右にぬくぬく二度三度くねり、さらに垂直に落下する。途端に、まるで思いもかけぬ角度で上向き、異様な弧を描きながら這い昇る。不均衡に高々と面をえぐり切り込んで、また平坦ともとのコースに戻る」

「更にこの紋様をつなぐ横線をたどって行くと、突然、鍾乳石がねぢり曲って垂れ下って来たような突拍子もない把手状の装飾にぶつかる。土器全体の大きさ、重さに対して、把手にしては不釣り合いに小さい。だが、ただの装飾にしてはまた全く不調和な大きさに飛出している。しかも既にその隙間からは、重なり合って奇怪なシルエットがのぞき込んでいるではないか。上縁にはよきによきした凸起が、怪獣の角のように、不気味に交錯する」



図5 長野県伊那市宮ノ前出土土器
(左：東京国立博物館所蔵 右：岡本太郎撮影)

さらに、岡本が博物館で実物の縄文土器と対峙しながら驚異と感じ、捉えたことがあります。それは縄文人の鮮やかで鋭く、完璧な空間の処理です。芸術史に於いて彫刻は常に一定の空間を占める塊であったが、20世紀のアヴァンギャルド、抽象主義彫刻家達は、外部であった空間を内に取り入れて造形要素に転化せしめ、遂には空間そのものを彫刻化した偉大な功績を残しますが、これらと比較しても縄文土器の空間処理は劣るどころか、むしろ激しいと岡本は言います。それは狩猟民である縄文人がその活動において鋭敏な三次元的感覚を備えていたため、土器の空間処理において的確、精緻な捉え方ができたと断じます。

縄文土器の空間性を強調した岡本は、単に三次元の立体としてこれを彫刻的・美学的に鑑賞するのではなく、縄文土器の異様な神秘性に注目し、皮相な現実を超えた四次元的性格に考察をさらに進めなければ縄文文化を正しく理解出来ないとし、そこに縄文土器の真の面目が躍如するとさらに論を進めます。

つまり、原始社会の物質的並びに精神的な生活は呪術を含めた原始宗教に支えられており、土偶・土版などは勿論、日常用具である土器の形態や紋様までも深く厳格なイデオロギーを担わされているとします。それは土器の装飾性や形態を見れば実用のみを主眼としていないことは明瞭であり、複雑で奇怪な

紋様が単に美学的意識によって作り上げられていないことから確かだと言います。強烈な宗教的・呪術的意味を帯びており、いわば四次元を指向していると考えたのでした。

岡本の「縄文土器論」は、1956(昭和31)年に出版された『日本の伝統』に「縄文土器 -民族の生命力」として掲載されますが、文意も平易になって大幅に加筆されています。また、「縄文土器論」の際にプロの写真家が撮ったきれいな写真では自分の突きつけないものが表現できないと考え、『日本の伝統』には1956(昭和31)年2月～3月に東京国立博物館をはじめ、東京大学人類学教室、明治大学考古学陳列館などで自ら撮った縄文土器などの写真を掲載しています(図6右)。



図6 富山県氷見市朝日貝塚出土土器
(左：東京大学総合研究博物館所蔵 右：岡本太郎撮影)

『日本の伝統』では、縄文土器を通じて大陸からの文化的影響を受ける以前の本来の日本文化、日本人の美意識とは何かについて考察を深め、縄文は日本の誇るべき原始芸術であり、伝統であると説いたのです。

岡本の「縄文土器論」は大きな反響を呼び、縄文造形が弥生造形より遡って日本原始芸術の位置を獲得しました。岡本以前は考古資料としてしか観られず、芸術家達の目に留まることのなかった縄文造形が、これ以降は美的鑑賞の対象となって多くの美術書の巻頭を飾り、世の人々の注目度は上がります。一方、岡本にとっても縄文との出会いによって、その激しくとも無理のない美しさなどの魅力を芸術活動に掴み取っていったと思われれます。しかしながら、考古学界からの反応はほとんどなく、専門書に取り上げられたのは『日本の伝統』をさらに平易に書き改めた「根源の美 -縄文文化の人間発見-」を所収した、1969(昭和44)年発行の『日本文化の歴史』第1巻(学習研究社)だけでした。

その後、1972(昭和47)年の高松塚古墳の壁画発見などにより考古学ブームが沸き起こり、20世紀末の青森県三内丸山遺跡の調査成果などから縄文に対する関心が高まり、2021(令和3)年の北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産への登録と、縄文ブームは現在まで続いています。近年、その火付け役となった岡本太郎の功績を再評価する展示会や論評が目につくようになりましたが、岡本が指摘した「縄文土器論」に係る考古学的研究は石井匠さんなどの試みが一部あるものの、今後の課題です。

2 縄文ZINE

縄文+MAGAZINE、『縄文ZINE』は縄文時代をテーマにしたA5判のフリーペーパーです。発行元はグラフィック全般を手掛ける株式会社ニルソンデザイン事務所で、2015(平成27)年8月に創刊され、最新刊は2021(令和3)年3月の第12号となります。第1号の編集後記にあるように「縄文時代という、日本人なら誰もが知っていても、ほとんどの人が詳しいことを知らないという特異な時代。この時代の面白さが少しでも読者に伝わればいいなと思っています」というコンセプトで編集されています。

通巻しているお約束的な内容が多々ありますが、先ず気になるのが表紙の仕掛けです。横書きの誌名が左上で縦置きになっており、「なんて読むの?」と横置きにするため、思わず手に取ってしまいます。

また、土偶のイラストを右上に置き、そのポーズをモデルが行うDOGUMO(表紙はタレントモデルの場合が多いが、誌上には様々な人がモデルになっています)がメインに写っていて、目を引きます(図7)。次に毎号組まれる「JOMONZINE SPECIAL」という特集のタイトルがあり、読者の関心をおよぼすようなキャッチコピー的なものです。例えば、第2号の「土器は燃えているか」(火炎土器をフィーチャー)はルネ・クレマン監督「パリは燃えているか」から、第6号の「1951年の岡本太郎」



図7 縄文ZINE

(岡本太郎と縄文土器)は本田美奈子「1986年のマリリン」から、第7号「星糞のディスタンス」(縄文人と黒曜石産地)はTHE ALFEEの「星空のディスタンス」から、第9号の「勝坂46」(勝坂式土器46個体を専門的&ポップにフィーチャー)は秋元康プロデュース「坂道シリーズ」からと秀逸なネーミングです。

記事の内容は編集部や縄文ライターが現地取材したレポートものなど専門的な内容を興味深く追求したり、わかりやすくしたりなど、王道的ですが、縄文に関心が薄い人にも興味を持ってもらえるように、現代人の縄文弱者の質問に縄文人が真面目&小ネタ的に答える「縄弱のための縄文時代質疑応答」をはじめ、「カップ焼きそば文化圏と縄文土器文化圏」など縄文時代と現代との接点を真面目に? 模索した記事、遺跡名から土地の記憶やまつわるものなど想像力が広がる「遺跡はみんなキラキラネーム」、くすっと笑える「縄文短歌・俳句大賞 よみ人は遺跡の風に」など、「縄文と色々なカルチャーを掛け合わせる実験を毎回果敢に試みています」と第5号の編集後記で述べているように多種多彩であり、「縄文興味ない層」から「そもそも縄文好き層」まで、幅広い支持を得ているとのこと。現在、発行部数は30,000部、全国各地の博物館・書店の他に、町のカフェや飲食店にも置いてあります。

編集発行人はニルソンデザイン事務所代表でもある望月昭秀さんで、今回、少しだけお話を聞くことが出来ました。それによると「縄文に惹かれたのは、縄文のデザインに興味があり、長野県茅野市の尖石遺跡&尖石縄文考古館に行ってみたのが最初のきっかけ」財源は基本持ち出しではじめた。赤字だが最近では広告費で印刷費と送料は賄えるようになった「仕事としてやっていないので好きに作っている感じ」とのこと。また「Twitterを拝見していますが、本当に素晴らしいフットワーク。その原動力というか、突き動かされる理由は?」とお聞きしたら、「単純に土器を見たりするのが面白い。研究者の皆さんのお話を聞くのも面白く、それを取り巻くのもまた面白いなと思っています」とのこと。遊びの部分を含めた縄文のマナビを楽しみ、それを広めていきたいという姿勢に共感を持つところ。です。

註1 岡本太郎記念館ホームページ「岡本太郎とは」

図の出典元など

図1・2:(公財)千葉県教育振興財団作成、図3・図5右・図6右:川崎市立岡本太郎美術館提供、図4:堀越正行氏提供、図5左:特別展『縄文-1万年の美の鼓動』図録(東京国立博物館)より転載、図6左:東京大学総合研究博物館提供、図7:縄文ZINE第1号・第5号・第9号・第12号((株)ニルソンデザイン事務所)より転載

東日本と西日本の縄文土器の出会い

加納 実

はじめに

縄文土器の文様がなぜ変化していくのかという問いに対するわかりやすい答えを、縄文土器研究者はまだもちあわせていません。その原因のひとつは、様々な地域や時期によって、縄文土器の変化の仕組みが異なるからです。

ここでは関東地方の縄文時代後期初頭と後期前半という限られた地域と時期のなかで、縄文土器の変化の仕組みが異なることを説明したいと思います。紹介する土器群は、

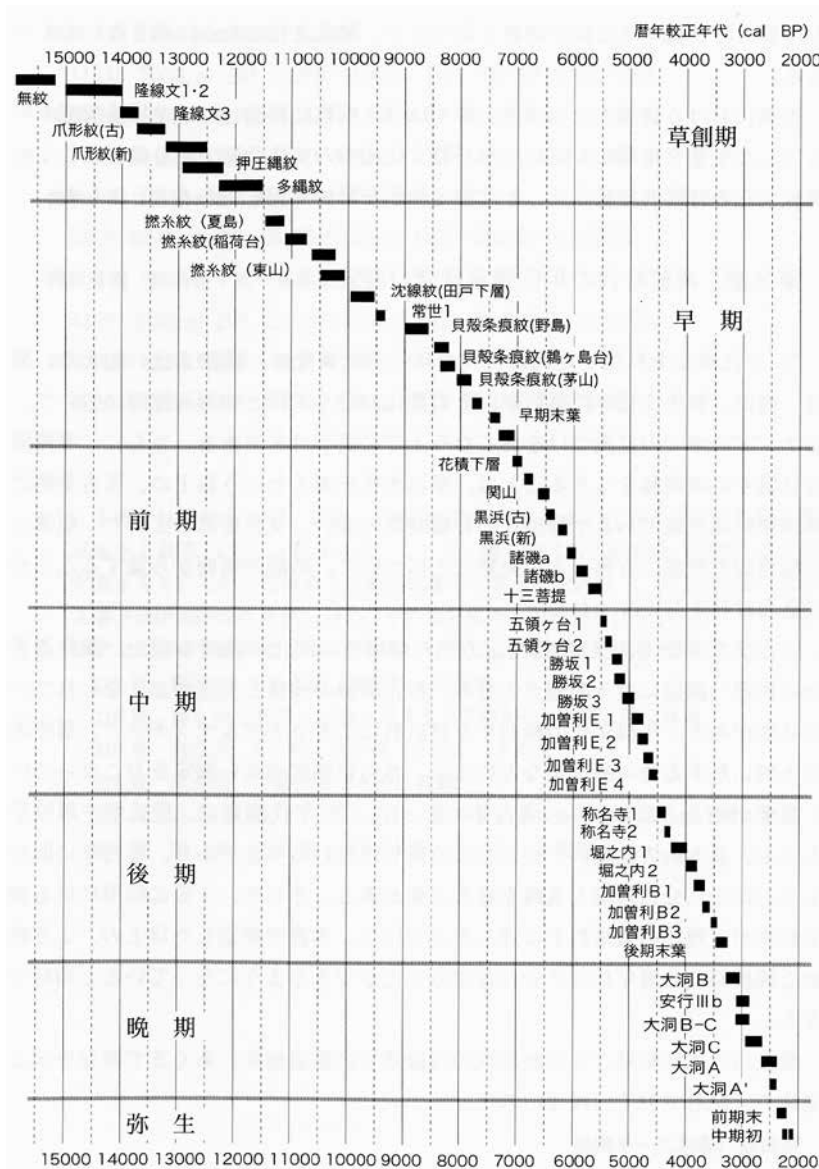


図1 縄文土器の実年代 (小林2019)

後期初頭 称名寺式土器(図3)
(4,490年前～4,235年前 255年間)
(小林2019)
後期前半 堀之内1式土器(図2)
(4,235年前～4,050年前 185年間)
(小林2019)
です(図1)。

さて、今回の発表では、「縄文土器」に関わる「マナビ」の一端を紹介させていただくことによって、皆さんが「縄文土器」を楽しく学ぶきっかけを提供したいという趣旨(公益財団法人千葉県教育振興財団2021)のもと、最新の成果を用いながら、できるだけわかりやすく示したいと思います。また、学びをより深めたい方々のために、文末に多くの文献を記載しました。

なお、講演での説明は、はじめに、比較的变化の方向性を説明しやすい堀之内1式土器(図2)について解説し、次に、隣接する時期でありながら堀之内1式土器とは全く異なる変化を示す称名寺式土

器(図3)について、「東日本と西日本の縄文土器の出会い」というきりくちで解説したいと思います。解説の最後には、堀之内1式土器や称名寺式土器の研究の動向を踏まえ、縄文土器研究の現状について、若干の私見を述べさせていただければと思います。

1 堀之内1式土器の変化(図2)

堀之内1式土器は、系譜(出自・祖型)を異にする6種類の土器群(類型)から構成されることが知られています。土器の変化は、6種類のうちのひとつである東北地方南部に分布する綱取I式土器を母体とする土器の変化を目安に、おおむね5段階の変化を認識することができます(石井1993、加納2019、鈴木1982など)。各段階の特徴を古い段階から示しますと、

第1段階 閉じた図形のなかを無文にする

第2段階 無文の図形は閉じることなく末端を開放する

第3段階 図形のなかにも縄文を施す

第4段階 複数の線で文様を描く

第5段階 図形の周りに側線を施す

となり(鈴木1982)、遺跡から出土する土器群を目の当たりにした際は、この東北地方南部に分布する綱取I式土器を母体とする土器群の変化を目安に、細かな時期を知ることができます。

2 称名寺式土器の変化(図3)

称名寺式土器は、おおむね7段階の変化を認識することができます。その成立は、近畿地方中期最終末から後期初頭の土器群の関東地方への侵入と土着化などによって語られています(石井1992・2015、鈴木1990a・1990b・2011)。

しかしその変化は、堀之内1式土器のような標準的な系譜の変化をもとに、第1段階から第7段階までを容易に説明することはできません。また、堀之内1式土器のように、系譜(出自・祖型)を異にする複数の土器群(類型)を明確に抽出・認識することが困難です。

この、称名寺式土器と堀之内1式土器の変化や類型の認識の差異が生じている要因とはどのようなのでしょうか。

関東地方の中期最終末には加曾利E式土器(図4)が分布しますが、この安定した分布域に突如として、近畿地方中期最終末から後期初頭の土器群が侵入してきます。しかし、加曾利E式土器の伝統は途絶えることなく根強く残り、近畿地方の土器群と関東地方の土器群(加曾利E式土器)の接触・融合のなかからさまざまな土器群があらわれているからなのです。

おわりに

一見、複雑そうに見える称名寺式土器であっても、近畿地方の土器群と在地の加曾利E式土器の様相との比較により、個別の土器の製作(成立)の由来をうかがい知ることができます。

やや強引な表現になりますが、各地域・各遺跡において、近畿地方の土器群と加曾利E式土器の両系統の土器の融合・接触によって生成した土器群が、称名寺式土器であると捉え得ることができます。

一方、単純そうに見える堀之内1式土器においても、現状での研究成果にとどまっているわけではあ

南関東東部 堀之内1式土器分類配列図

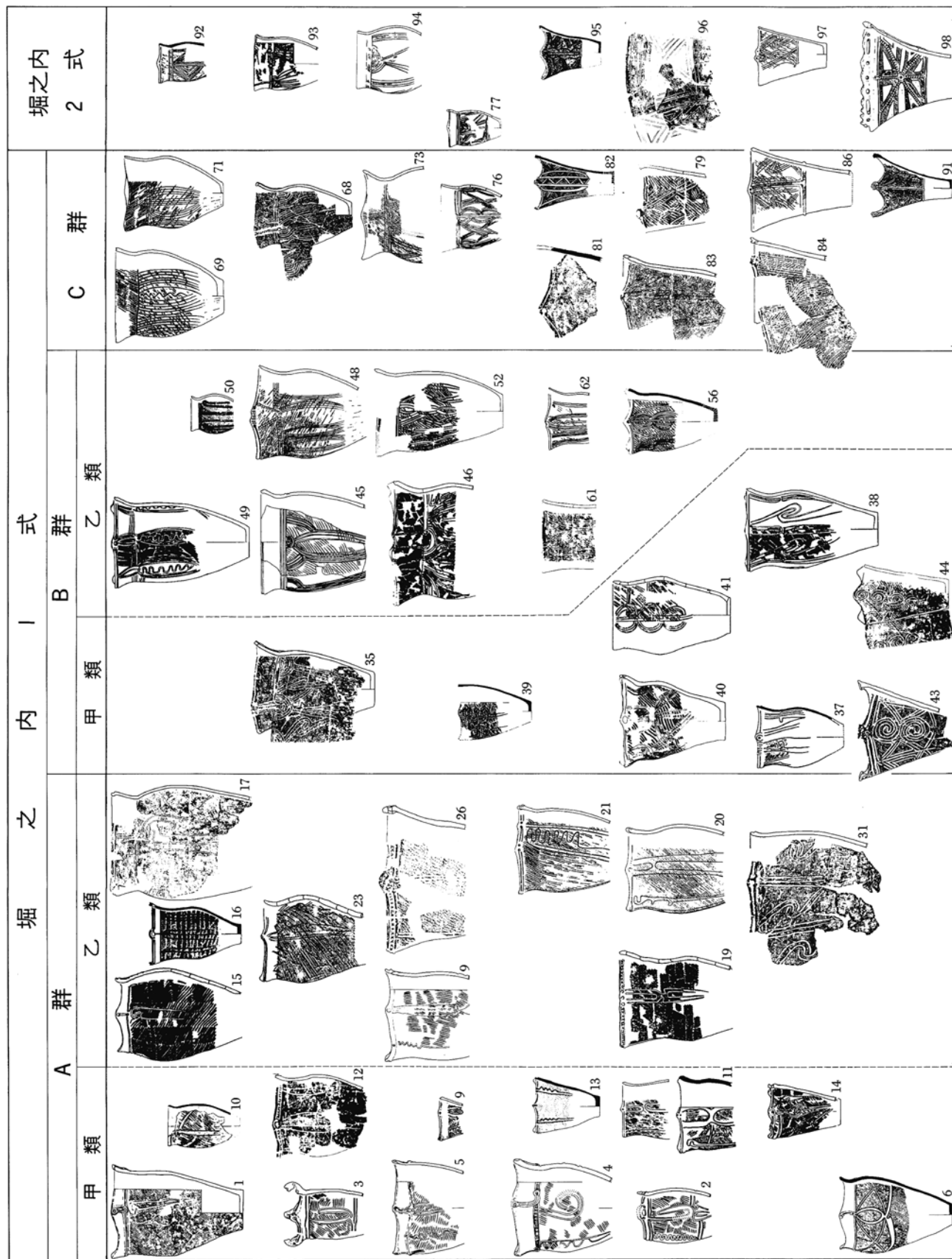


図2 堀之内1式土器の変遷 (鈴木1982)

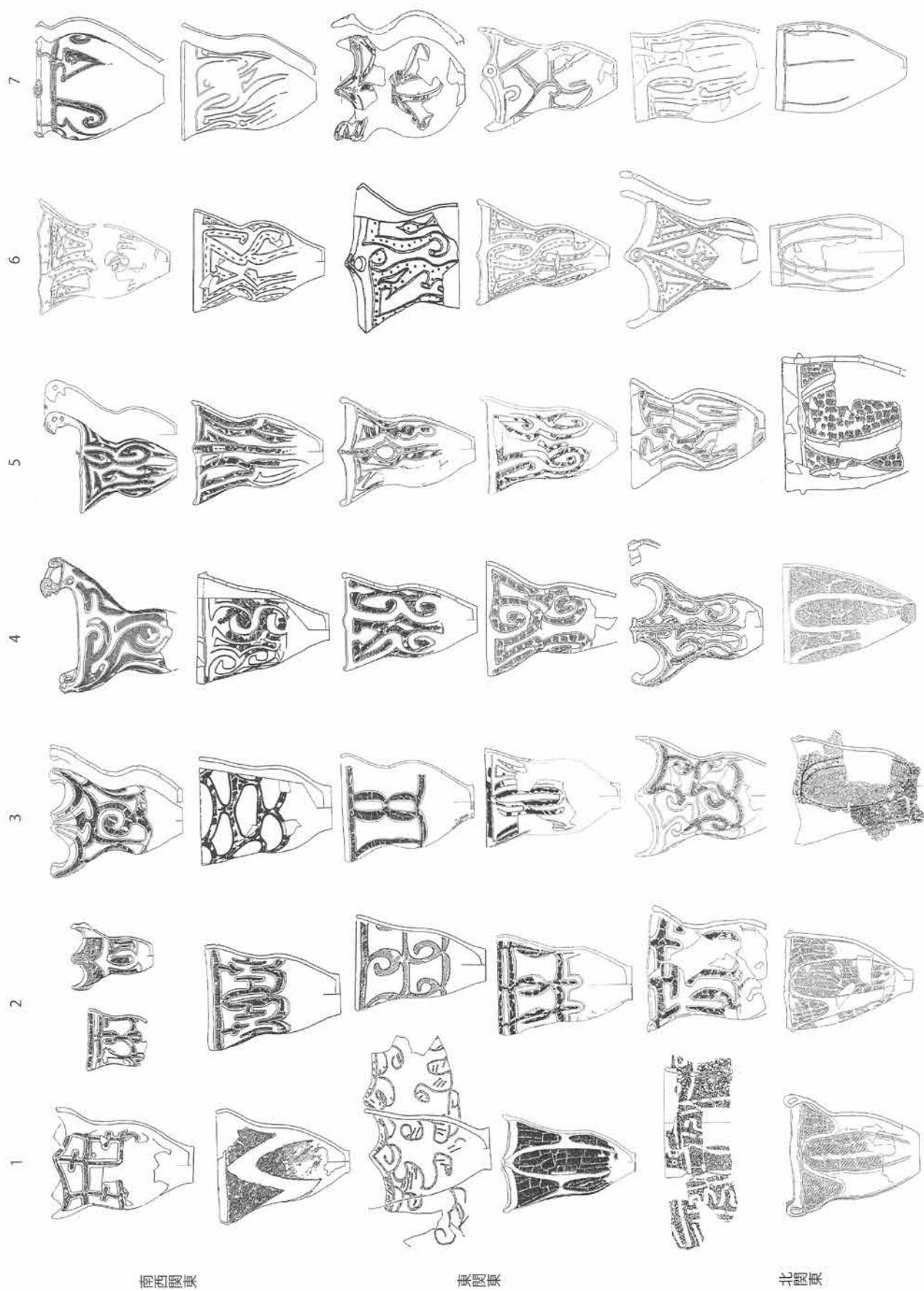
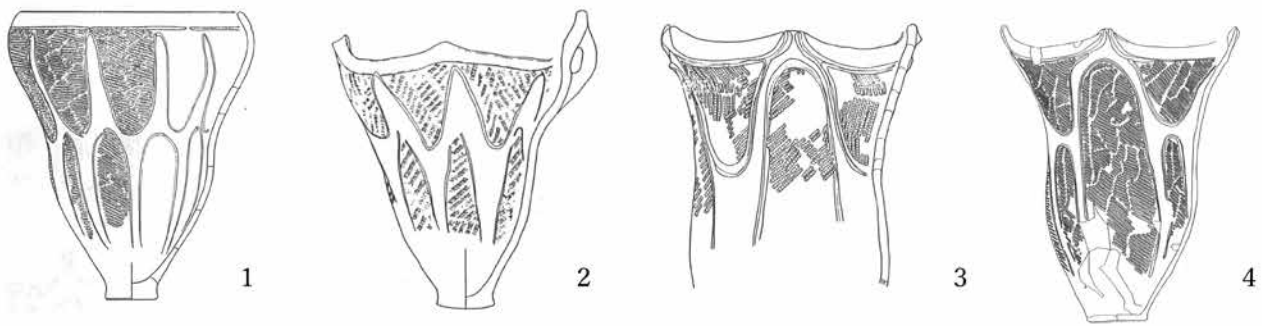


図3 称名寺式土器の変遷（称名寺式土器検討会2017）



1：中野僧御堂（千葉県） 2：中野木新山（千葉県） 3：築地台（千葉県） 4：砂川（茨城県）

図4 加曾利E式土器（縮尺任意 稲村1990より作成）

りません。

例えば、「堀之内1式土器は6群もしくは6類型に分類され、各群・類はおおむね5段階程度の時間的変遷が確認されています。このことは、出自・系統が異なる土器が製作され続けていること、出自・系統の差異が受け継がれていること、すなわち出自・系統が相互に異なることが明確に意識され続けていることが予想され」ています(加納2021)。

このことから、「土器製作とは、土器製作者の「出自」を表現した(表現し続けた)行為、土器製作者の「出自」を差異化して製作した(製作し続けた)行為である可能性があるのではないか。つまり、土器づくりとは、そもそも、出自を異にすることを確認する行為を併せもつものなのではないか」(加納2021)との見解も提示されています。

また、「さらには、土器製作者は、土器の製作時において、現在の考古学研究者のように、限定された地域での土器群の変遷を見渡すことなどできず、広域に分布する土器群の共通性や差異を見渡すこともできないことから、土器製作者は限定された時間と空間において伝承されてきた情報や、新たに獲得した情報によって土器製作を行っているという前提を、明確に再確認する必要がある」という問題意識も提起されています(加納2021)。

文献

- 石井 寛1982「南関東西部(多摩丘陵以南)」『シンポジウム堀之内式土器資料集』市立市川考古博物館
- 石井 寛1990「称名寺式土器に関する研究史」『調査研究収録』第7冊 特集 称名寺式土器に関する交流研究会の記録 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛1993『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛2015「稲ヶ原遺跡出土土器群が提起する諸問題」『横浜市歴史博物館 紀要』VOL.19
- 石井 寛2016「関東南西部の称名寺式土器」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館
- 石井 寛2018「堀之内1式土器・2式土器の成立を巡る若干の問題」『東海縄文研究会 第7回例会「東海からみた後期前葉土器群」その1』東海縄文研究会

- 稲村晃嗣1990「加曾利E系列の土器群」『調査研究収録』第7冊 特集 称名寺式土器に関する交流研究会の記録 横浜市埋蔵文化財センター
- 江原 英2016「北関東地域の様相」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館
- 加納 実1990「千葉県における縄紋後期前半土器型式研究の課題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 加納 実1994「縄文時代後期・関西系土器群の新例-市原市武士遺跡の成果から(Ⅱ)-」『研究連絡誌』第39号 財団法人千葉県文化財センター
- 加納 実2000「武士遺跡出土の関西系土器群の再評価」『貝塚博物館紀要』第27号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実2002「南関東における堀之内式土器の様相」『後期前半の再検討』第15回縄文セミナー記録集 縄文セミナーの会
- 加納 実2003「縄文時代後期堀之内1式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』第30号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実2008「堀之内式土器」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション
- 加納 実2016「関東東部の中期最終末から後期初頭の土器群」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館
- 加納 実2019「堀之内1式土器研究の現状-千葉県域資料を中心に-」『東海縄文研究会 第8回例会「東海からみた後期前葉土器群」その2』東海縄文研究会
- 加納 実2020「【資料紹介】千葉市若葉区餅ヶ崎遺跡における異質な土器群-近畿地方北白川C式系土器群の紹介を中心に-」『貝塚博物館紀要』第46号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実2021「堀之内1式土器の個別別系統分析」『考古学者の思考法』(株)同成社
- 公益財団法人千葉県教育振興財団2021『令和3年度出土遺物公開事業 らくがく縄文館 -縄文土器のマナビを楽しむ-』
- 小林謙一2019『縄文時代の実年代講座』(株)同成社
- 称名寺式土器検討会2017「シンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」の報告」『横浜市歴史博物館 紀要』VOL.21
- 鈴木徳雄1982「南関東東部(下総台地)」『シンポジウム堀之内式土器資料集』市立市川考古博物館
- 鈴木徳雄1984「関東西部における縄文後期前半の土器様相」『王子台遺跡とその周辺』東海大学文化部連合会考古学研究会
- 鈴木徳雄1990a「称名寺・堀之内1式の諸問題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄1990b「称名寺式土器」『調査研究収録』第7冊 特集 称名寺式土器に関する交流研究会の記録 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄2011「称名寺式における異系統土器の共存-異系統土器の移入と変容の過程-」『異系統土器の出会い』(株)同成社
- 鈴木徳雄2012「堀之内式土器研究の諸問題」『縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄2018「縄紋後期前半における土器型式の存立構造-関東信越地域の「型式」と諸“類型”-」『地域考古学』第3号 地域考古学研究会
- 本間 宏2008「南境式・綱取式土器」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション

土器破片が伝える土器製作事情

—加曾利E式土器の成形について—

戸村正己

はじめに

縄文土器は如何にして製作されたのか？の課題は、我が国の考古学が開始された直後から関心が持たれた研究テーマです。しかしながら、出土資料の少なさや、記録がない時代の技術の探求という事情から、主に身近な陶芸技術や民族例などの実態を通して類推する形での研究が行われてきました。

基本的に土器製作の実態を把握するためには、直接的な出土遺物に残された痕跡や製作関連遺構の状況を手掛かりに調査することが重要ですが、併せて実験考古学と呼ばれる他の分野などとの連携を計り実際に製作を通した検証を行うことが必要であると思います。

早い段階から注目、研究されてきた土器製作研究の歩みの中で、とりわけ加曾利貝塚博物館における新井司郎氏の研究成果が、昭和48年(1973年)に『縄文土器の技術-その実験的研究序説-』として発表され、今日の同研究の基礎的指標として位置付けられています。

しかしながら、当研究は1971年の新井氏急逝により中断を余儀なくされました。そして、44年後の平成27年(2015年)筆者が新井氏の研究を引き継ぐ形で携わり、この度発表の研究成果を得ることができました。その内容を以下に記したいと思います。

1 「短冊状土器破片」の発見

本研究を再スタートさせ、收藏されていた土器破片資料の中から製作技術解明の糸口を見出そうと取り組み、膨大な土器破片の中から、特徴的な“長方形”の、「短冊状土器破片」と命名した数千点に及ぶ破片の抽出を行いました。

それは、特に加曾利貝塚に因んで型式設定されている、縄文中期の「加曾利E式土器」に焦点を当てた調査において、顕著にとらえられた実状でした。この「短冊状土器破片」が存在する理由として考えられることは、土器製作工程の“成形”に関係した現象としての意味合いを有し、直接的に粘土積み上げの上・下接合面の破断・剥離状態を示しているものと推測されました。このことによって、土器製作の根幹をなす“成形技法”についての本腰を入れた研究を行うことになりました。



図1 「加曾利E式土器」と「短冊状土器破片」

2 「短冊状土器破片」の形状(巾・厚さ)

土器製作技法探求の視点を持った土器破片の観察によって、様々な製作に関する情報を得ることができました。

例えば、原材料である粘土の素地生成状況や粘土積み上げ体勢を想起させる破片角度の形状等々、土器の生成から使用～廃棄に至る多岐にわたる内容を有していました。

そのような情報源としての土器破片資料の中でも、「短冊状土器破片」と命名した土器破片の抽出は、土器の製作技法を解明する上で特に重要であると思われました。

当該の土器破片に見られる縦巾は、土器成形における粘土積み上げの高さを直接反映している公算が高く、その形状由来を究明することの意義を強く感じさせるものでした。

壊れた状態は、どのように作られたのかを間接的に示しているものと考えられ、言うならば“壊れ方＝作られ方”という定義が成り立つのではないかと考えます。

「短冊状土器破片」は、今回の調査範囲において概ね、縄文中期の加曽利E式土器の破片が主体であり、抽出総数は約2,500点を数えました。

調査の結果、「短冊状土器破片」の巾は、最小約2cm巾、続いて約3cm巾、約3.5cm巾、約4cm巾の順に5mm間隔で捉えられ、最大で約7cm巾までの概ね11段階に亘る状況であることが分かりました。

そして、この11段階の中に、実質の粘土積み上げ単位巾の破片と、その単位巾を内包していると考えられる大型破片とが存在していました。「短冊状土器破片」抽出の内容は、図3の写真と図4のグラフに

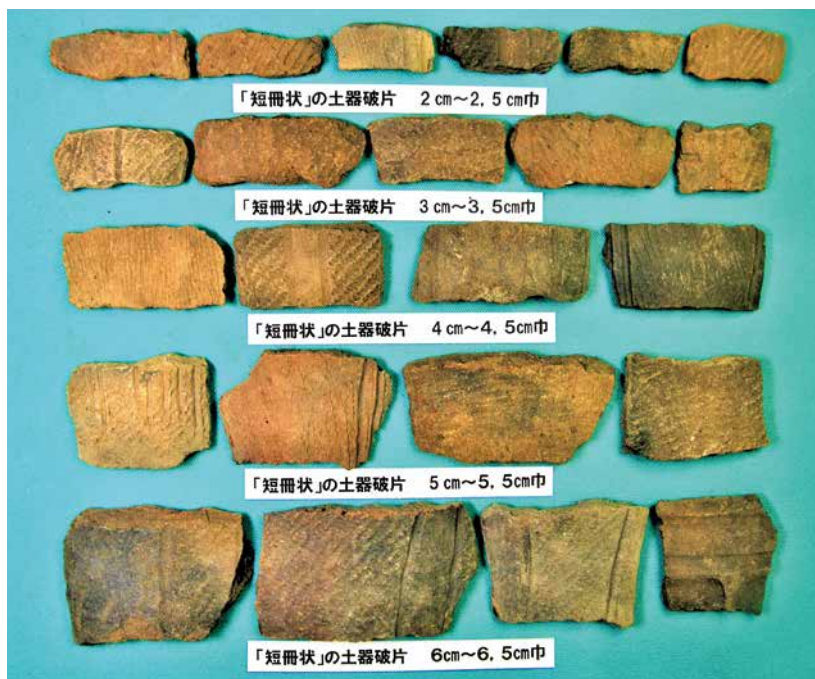


図3 「短冊状土器破片」の各種



図2 収蔵されていた土器破片

示したとおりです。

当該破片の巾についての調査結果では、約3cm、約3.5cm巾のものが最多で、抽出総数の約40%を占める割合、次いで約2cm、約4cmの範囲の破片が全体の30%を占める割合でした。

つまり、この結果から窺えることは、当時に行われていた土器成形は、約3cm巾及び3.5cm巾に粘土を積み上げる在り方を主として、そのサイズに付随する約4cm巾や約2.5cm巾の粘土積み上げの状況が垣間見えました。

一方、この巾の違いは厚さと関

係があるのかどうか？の調査も併せて行った結果、巾の違いに関らず全体的に約1cm前後の厚みを持った破片が大半であることが分かりました。

従って、巾の違いと厚さとの因果関係は特に認められませんでした。

このような巾・厚さに見られる一定の傾向は、決められた手法に則った製作の状況を示唆(しき)しているものと受け止めることができると思います。

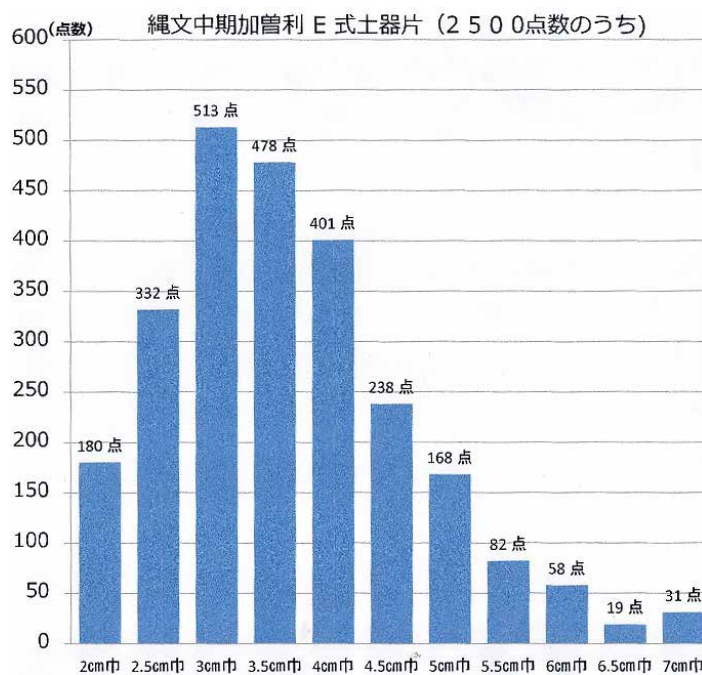


図4 「短冊状土器破片」巾別抽出数

3 如何なる技法によって“成形”がされたのか

連動した調査展開として、続いて〈如何(いか)なる手法の“成形”が成されているのか〉についての調査を行いました。

土器の成形は一般的に、①輪積み技法 ②巻き上げ技法 ③手捏ね技法 ④型作り技法等の技法が知られていますが、実際の土器の亀裂の入り方や壊れ方などの観察から判断すると、大方の土器は粘土紐ないし粘土帯を1段毎積み上げる輪積み技法によるものと考えられます。

そして、破片の割れ口等の観察により、概ね3通りの粘土の積み上げ手法が捉えられました。

- A) 外被せ技法(積み上げの接合部が外側に向かって傾斜する接合タイプ)
- B) 内被せ技法(外被せ技法とは逆向きの内側に向かって傾斜する接合タイプ)
- C) 上被せ技法(積み上げの接合部が直上に平らになる接合タイプ)に分類しました。



A) 外被せ技法

B) 内被せ技法

C) 上被せ技法

図5 粘土積み上げ技法の各種

この分類に従って、器形全体に亘る部位の粘土積み上げ状況を見てみると、部位が明確な口縁部において3技法を駆使した成形がされているものの、特に「内被せ技法」駆使の高い状況が窺えました。

そして、器形の大半を占める胴部については、概ね「外被せ技法」による傾向であることが受け止められました。

以上の巾別・厚さ別、技法別の調査により、平均的な①粘土積み上げ巾(高さ)の確認、②厚さの確認、そして、③積み上げ技法駆使状況の結果を踏まえて想定される“成形”のあり方は、概略、外傾斜に粘土を積み上げる技法(外被せ技法)を駆使して、一段の高さを約3cm～約4cm程度に、厚さを約1cm程度になるように粘土を調整して作られたと考えることができます。

その統計結果を反映させて図化したのが図6です。

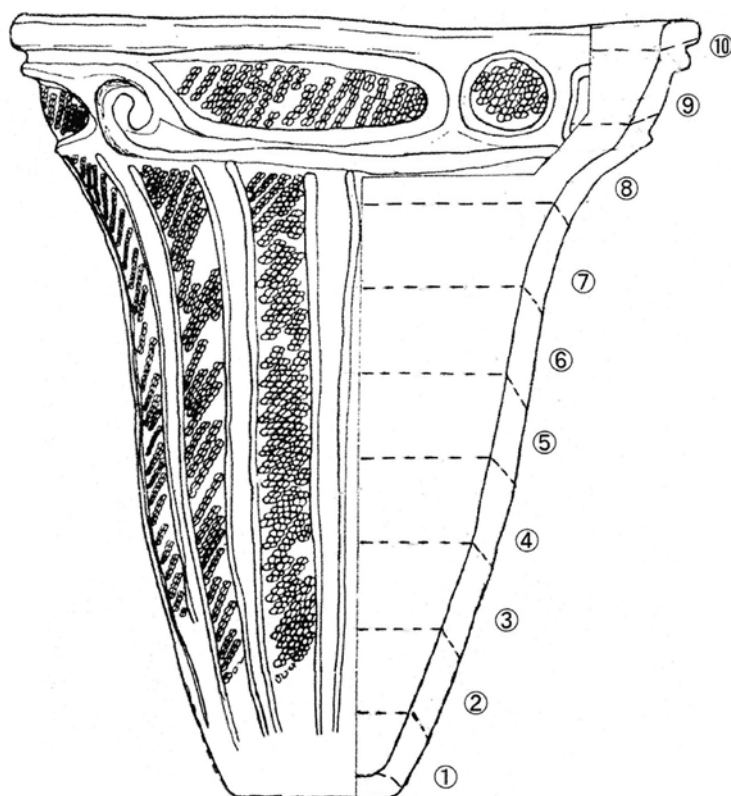


図6 統計結果からの成形想定

4 破断面が示す成形の不規則性

図6に示したような一定の法則に則った技法を駆使し、同サイズの粘土を等間隔に積み上げる手法の成形のあり方であれば何ら問題はないのですが、内情は一筋縄ではない実態が見出されました。

それは、つぶさに破片一片一片の上・下の破断・剥離面はだんはくりの観察を進めて行ったところ、上下の破断面の形状が共通するものと、異なったものが存在することが分かってきました。

筆者がこれまでにイメージしてきた土器成形のあり方は、終

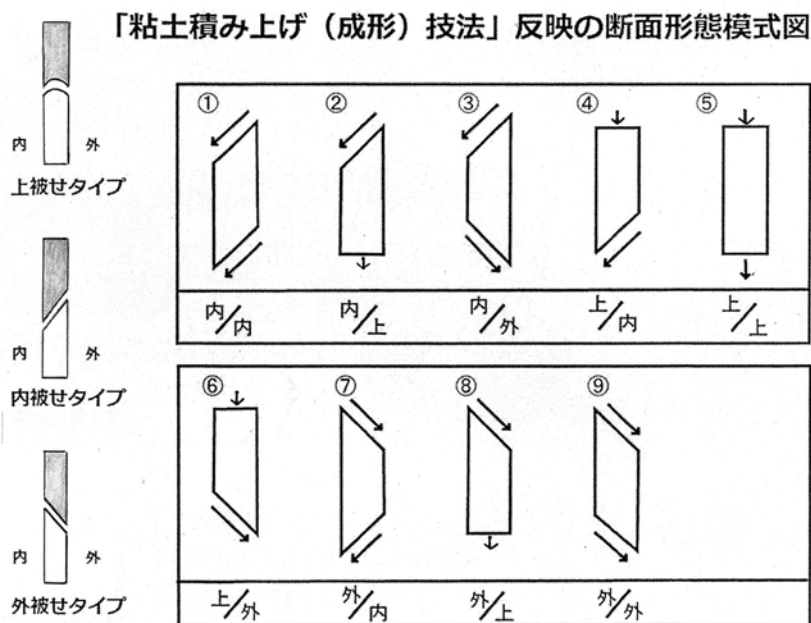


図7 成形技法反映の断面形態模式図

始一貫した同一技法の上に成り立っているものとの考えにより(図6)を作図した訳ですが、現実とは違っていました。

実情は、上下形状が同一になるタイプと、異なるタイプが存在しており、実態を踏まえて形態を概観してみると、9種類の形態が確認されました。その模式図が図7「成形技法反映の断面形態模式図」です。

図中に示した内/内、内/外、外/上等の表記は「外被せ技法」「内被せ技法」「上被せ技法」各々を省略した形で表し、図形は、土器破片の断面上・下形状を模式的に表しています。

図8の資料a(上)と資料b(下)は、実際の大型破片の中に成形技法が上・下で同一の破片と、異なる破片が確認される資料です。

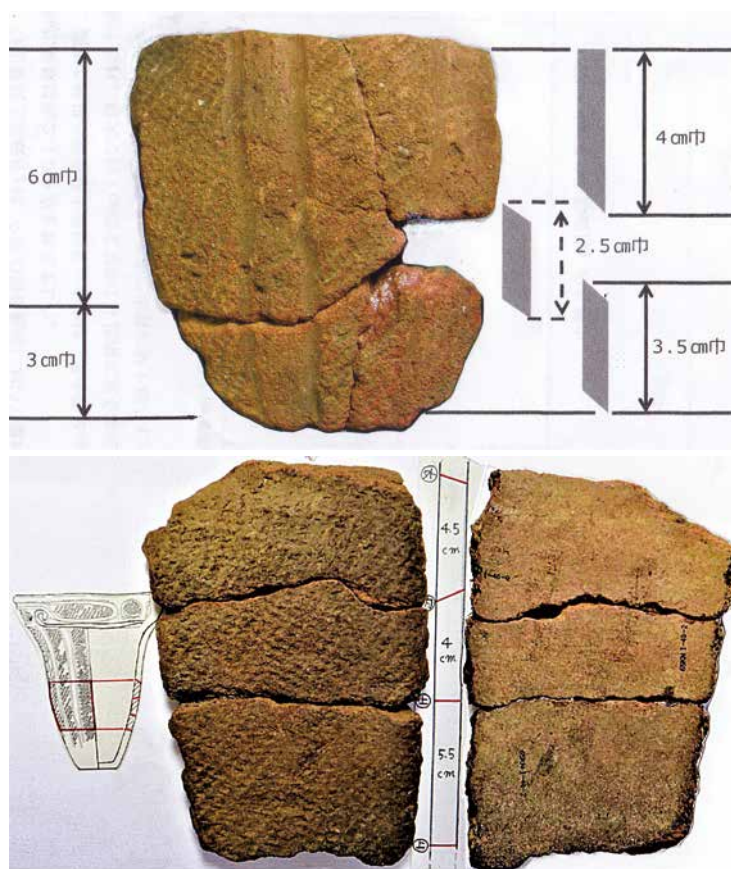
資料aの積み上げ内容は、下から上に向かって外/外/外/上の順に約3.5cm、約2.5cm、約4cm巾が見られ、資料bの場合は、上/上/内/外の順であり、その巾は約5.5cm、約4cm、約4.5cmの順になっています。

この実例が物語っているように、また「成形技法反映の断面形態模式図」(図7)に示したように、実際の成形実態は、統計上で捉えられたような規定の手法に則った形ではなく、状況に応じた対応であった可能性を改めて受け止めさせる内容でした。

このような、不規則な成形の実態をどのように理解すべきなのでしょうか？

以上のように、定まった技法によるある意味で、機械的に製作を図っていたのではない事実が浮かび上がり、その場の製作状況に応じた臨機応変の成形の実態が見られます。

しかしながら、調査結果全体で見ると、このような例はそれ程多い訳ではなく、大半は上・下の破断面(割れ口)が同一となる、特に外/外の「外被せ技法」反映の形態が中心であることが分かっています。



(上：資料a、下：資料b)

図8 大型破片に隠れている「成形技法・巾」

5 「成形技法反映の集約図」に見る加曾利E式土器の成形

1点1点のつぶさな土器破片の観察を通して、積み上げ巾や厚さ、積み上げ技法の概略的な成形の実態が捉えられました。

その内容を器全体として見通した場合はどのような状況になるのでしょうか？

この内容の調査については、先づ器全体を大きく①底部、②胴部下半部、③胴部上半部、④頸部、⑤口縁部部位別に区分しました。そして、更に全体を細かく15区分して破片個々を該当する各部分に当て嵌め、その部分においてどのような積み上げがされているのかを調べました。

調査の結果、部位別の、ひいては器全体の技法駆使状況が捉えられました。

その集約図(図9)に示したように、底部～立ち上げ部は、「外被せ技法」が主体、胴部下半～胴部上半～頸部上方までは、「外被せ技法」を主体としつつも「上被せ技法」も併用する傾向が捉えられました。

また、口縁部においては、他の部位とは状況が異なり、「内被せ技法」駆使の傾向が目立ち、特に口縁部上方においては高い使用傾向が窺えました。

一方、胴上半部下方～胴下半部上方部分においては、「上被せ技法」の高い駆使傾向が見られることから、この部分で積み上げ手法を一旦切り換えて、キャリパー器形を目指す整形ポイントに設定していた可能性が考えられます。

器全体における成形技法駆使の傾向を俯瞰すると、加曾利E式土器は、大方「外被せ技法」を主体とした成形の在り方であったように思われます。

今回の調査により、加曾利貝塚における加曾利E式土器の成形の状況が、^{おぼろげ}臆気に捉えられましたが、このような成形の在り方は、当然のことながら加曾利貝塚においてのみ展開していた訳ではなく、少なくとも同型式土器が分布する地域において、^{だいたいどうしようい}大同小異の形で展開していたものと思われます。

今後にわたり、土器成形の根幹である成形技法の確立、定着、継承、転換等の問題について、とりわけ本型式土器を挟んだ前後の時代において、如何なる条件や影響を受けて、どのように展開したのかについて探求していきたいと思います。

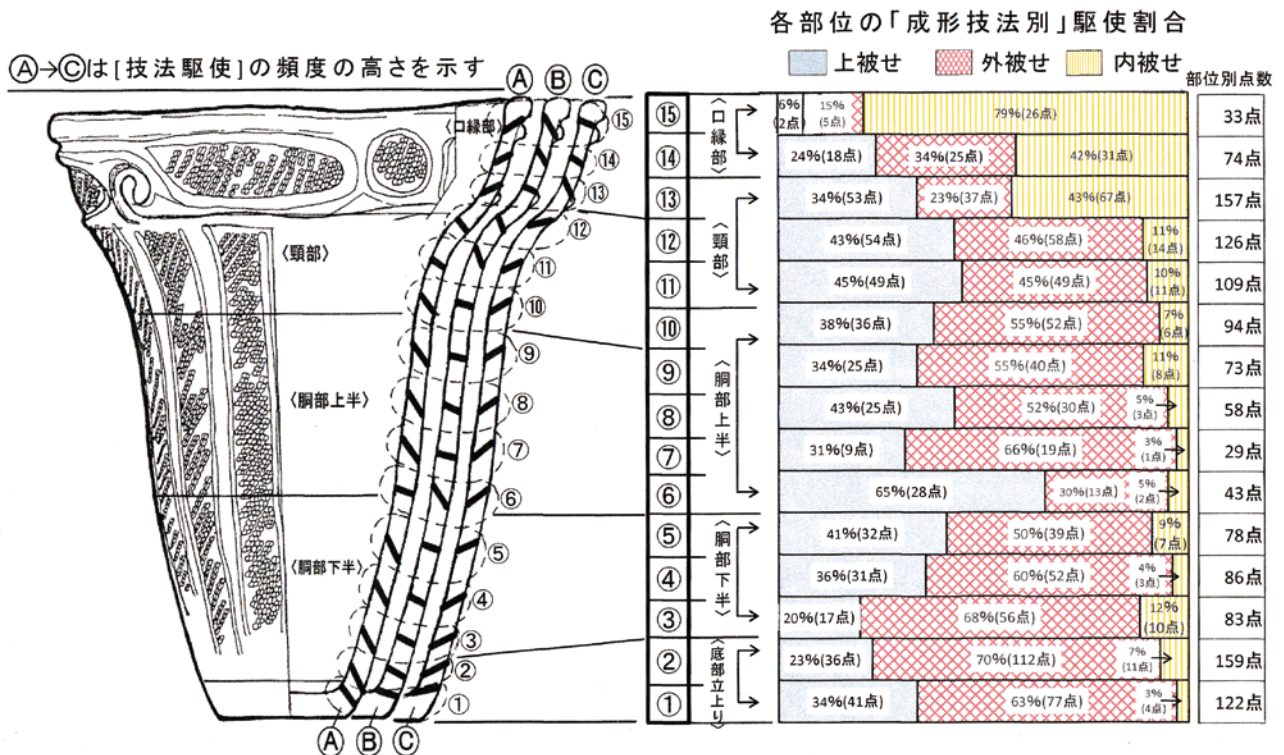


図9 加曾利E式土器における「部位別成形技法」の在り方

異形土器の広域分布と地域間の交流

西村 広 経

はじめに

縄文時代に作られた土器のほとんどは深鉢や浅鉢といった容器の形をしています。しかし、一般的な容器のカテゴリには当てはまらない、おかしな形をした土器も一定数作られました。ここでは、そのような土器を異形土器と呼ぶことにします。

異形土器といっても1つ1つが全く違う形をしているわけではなく、一定のルールにしたがって作られており、いくつかの種類に分けることができます。その中から今回とりあげるのは、縄文時代後期の中ごろ(約3700年前)に出現する異形台付土器と釣手土器です。これらの異形土器が最も多く出土しているのは千葉県で、関東東部を中心に分布しています。しかし、少数ながら東北や北海道でも出土しており、分布は東日本の広範囲に広がっています。一定のルールにしたがって作られた特殊な土器が別々に出現するとは考えにくく、広範囲で情報が共有されていたはずですが、したがって、異形土器は当時の広域的な地域間関係を探る手がかりになる可能性があります。

1 異形土器の定義と特徴

異形台付土器は、台の付いた壺あるいは鉢形の土器で、胴部に1対の穴が開けられ、穴の部分が筒状ないしラップ状に突き出ています(図1-1~7)。胴部に穴が開いているので、容器として液体を貯めることはできません。何に使ったのかはわかっていません。内部でお香を焚いて穴から煙を出したのではないかと、という説もありますが証拠はありません。

釣手土器は、お椀形の体部の上面にハンドル状の構造を取り付けた土器です(図1-9・10・12)。ハンドルの幅が広く、3~4単位で土器の上面をドーム状に覆うものもあり、香炉形土器と呼ばれています(図1-8・11)。これらは土器の上面を覆うという構造が共通しており、本質的に同じカテゴリの土器だと考えられます。しかし、どちらの名前も定着しているので、演者は釣手/香炉形土器と呼ぶことにしています。

釣手土器は縄文時代中期の中部高地でも作られますが、今回扱う後期の釣手/香炉形土器よりも1000年ほど古く、間をつなぐような資料もみつからないので、直接的な関係はない別のカテゴリの土器だと判断しています。ちなみに、中期の釣手土器にはススが付着している場合があり、内部で火を焚いたランタンのような道具だったと想定されています。しかし、後期以降の釣手/香炉形土器でそのような使用の痕跡は確認されておらず、何に使ったのかはわかっていません。

2 異形土器の変遷

(1) 異形台付土器の変遷

異形台付土器は縄文時代後期の中ごろ、加曽利B2式というタイプの土器が使われた時期に突如出現します。それ以前の時期にプロトタイプとなるような土器はみつかっておらず、この形がどのように成立したのかはわかっていません。

出現したころの異形台付土器は台付壺形で、口縁部、胴部、台部の3段構造になっています。穴の部分は短く突出しています(図1-1~3)。やや新しい後期終わりごろ段階では口縁部と台部がハの字状に開き、穴の突出はラップ状に大きくなります(図1-4)。さらに新しい段階では口縁部と台部が合体して鉢状になり、胴部と台部の2段構造に変化します(図1-5~7)。その後、縄文時代晩期の初めごろまで本来の形を失いつつ継続し、やがて作られなくなります。

北海道・東北では関東東部とほぼ同時に出現しています。図2-1~5が図1-1と同時期、図2-6が図1-2・3と同時期です。関東で口縁部と台部がハの字に開く段階までは残りますが(図2-7・8)、2段構造に変化する段階の資料はみつかりません。

(2) 釣手／香炉形土器

釣手／香炉形土器は加曽利B2式期に出現します。異形台付土器と同時です。やはり直前の時期にはプロトタイプが見当たらず、今のところは突然出現したとしか説明できません。関東東部では破片資料が多く、形や文様の変化はあまり詳しくわかっていませんが、釣手タイプと香炉形タイプは同時に出現しており(図1-8~10)、どちらかが原型という関係ではなさそうです。図1-9・10のような釣手タイプが後期の中ごろにたくさん作られますが、後期の終わりごろにはほとんど作られなくなり、香炉形タイプがわずかに残る程度になります(図1-11)。ただし、最近になって後期の終わりごろの釣手タイプの資料が報告されました(図1-12)。これまで見落としていただけで、後期の終わりまで釣手タイプが継続した可能性を検討する必要があります。

香炉形タイプの本場は東北で、関東と同時に出現しています。図2-9・10が出現期の資料です。図2-9~17は概ね番号順に新しく、17は後期の最終末に位置づけられます。その後、東北では縄文時代晩期の中ごろまで香炉形土器が作り続けられます。

3 異形土器の分布

異形土器の分布状況を見てみましょう。図3には異形土器が出現した後期中ごろ(加曽利B2式期)の分布と、後期終わりごろの分布を示しました。2種類とも出現と同時に北海道から中部高地まで広い範囲に拡散していることがわかります。この段階で、分布密度が最も高いのは2種類とも千葉県あたりです。情報の発信源は関東東部であった可能性が高いでしょう。

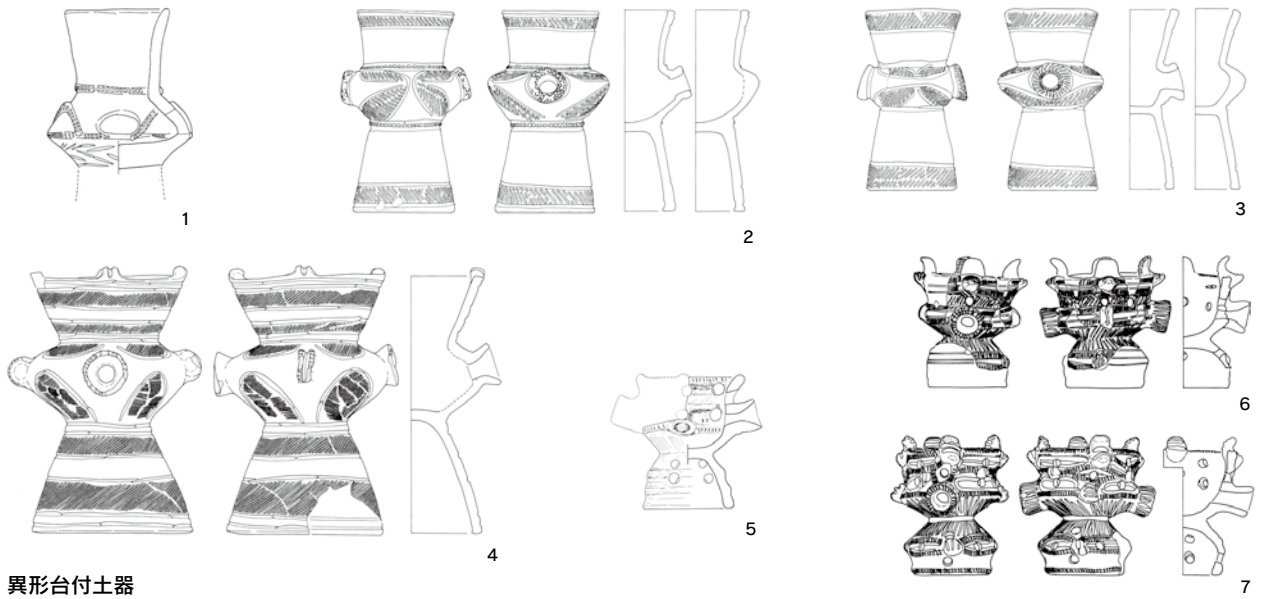
一方、後期終わりごろの分布状況は対照的です。異形台付土器が関東にしか残らず、釣手／香炉形土器は東北北部に集中しています。

2種類の異形土器はほぼ同時に出現し東日本全域に拡散し、その後各地域で選択されたものだけが残ったと考えることができます。

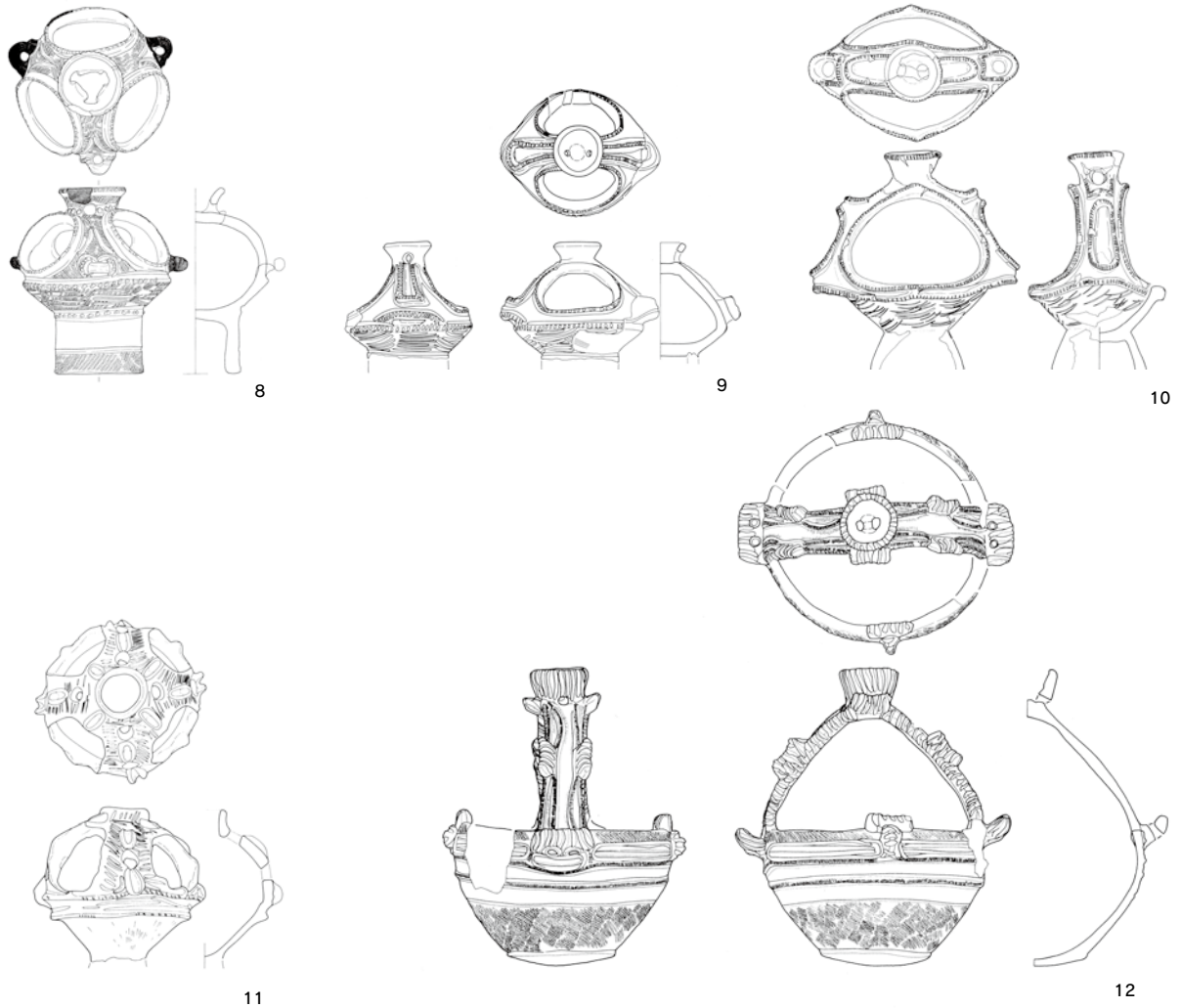
4 縄文時代後期中ごろの地域間関係

異形土器の分布の変化は地域間関係の変化を表しているのでしょうか。2種類の異形土器が出現する加曽利B2式期は各地域の土器群全体の変化でも大きな画期であることがわかっています。

関東では直前の時期に加曽利B1式というタイプの土器が作られていました。加曽利B1式は斉一性が強く、関東全域でよく似た土器が出土します(図4-1・2)。さらに、加曽利B1式土器は東北方面にも波及し、仙台湾や秋田県南部あたりまでよく似た土器が分布します(図4-3)。



異形台付土器

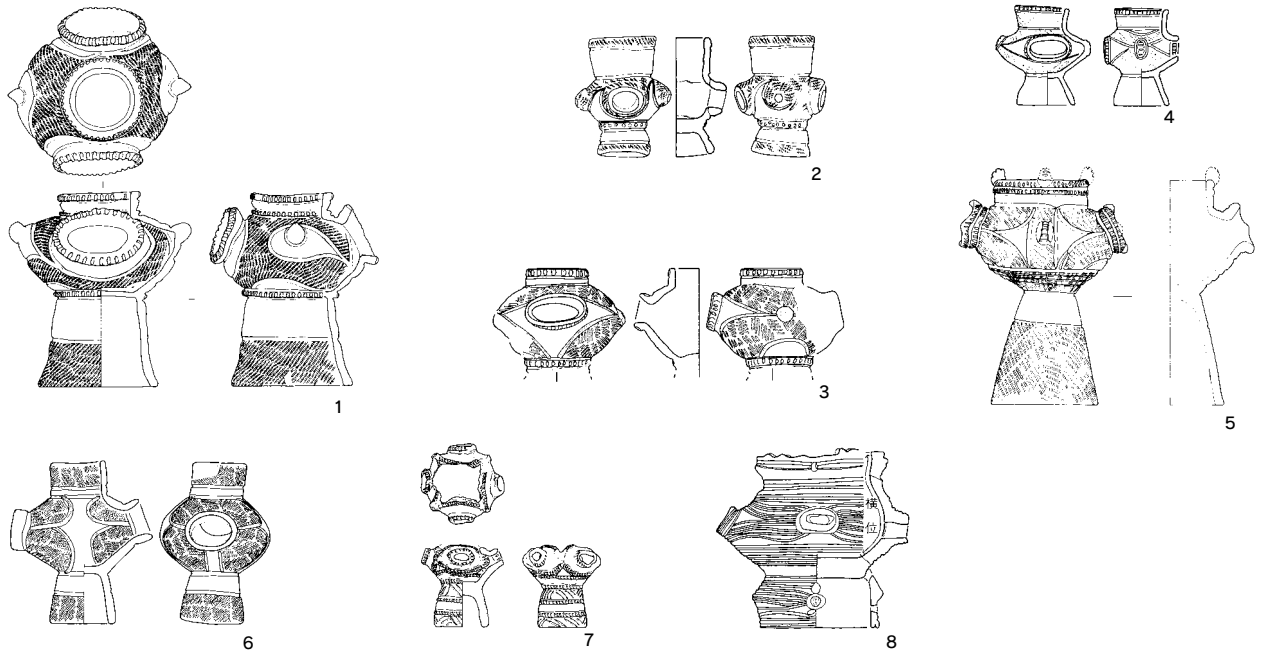


釣手/香炉形土器

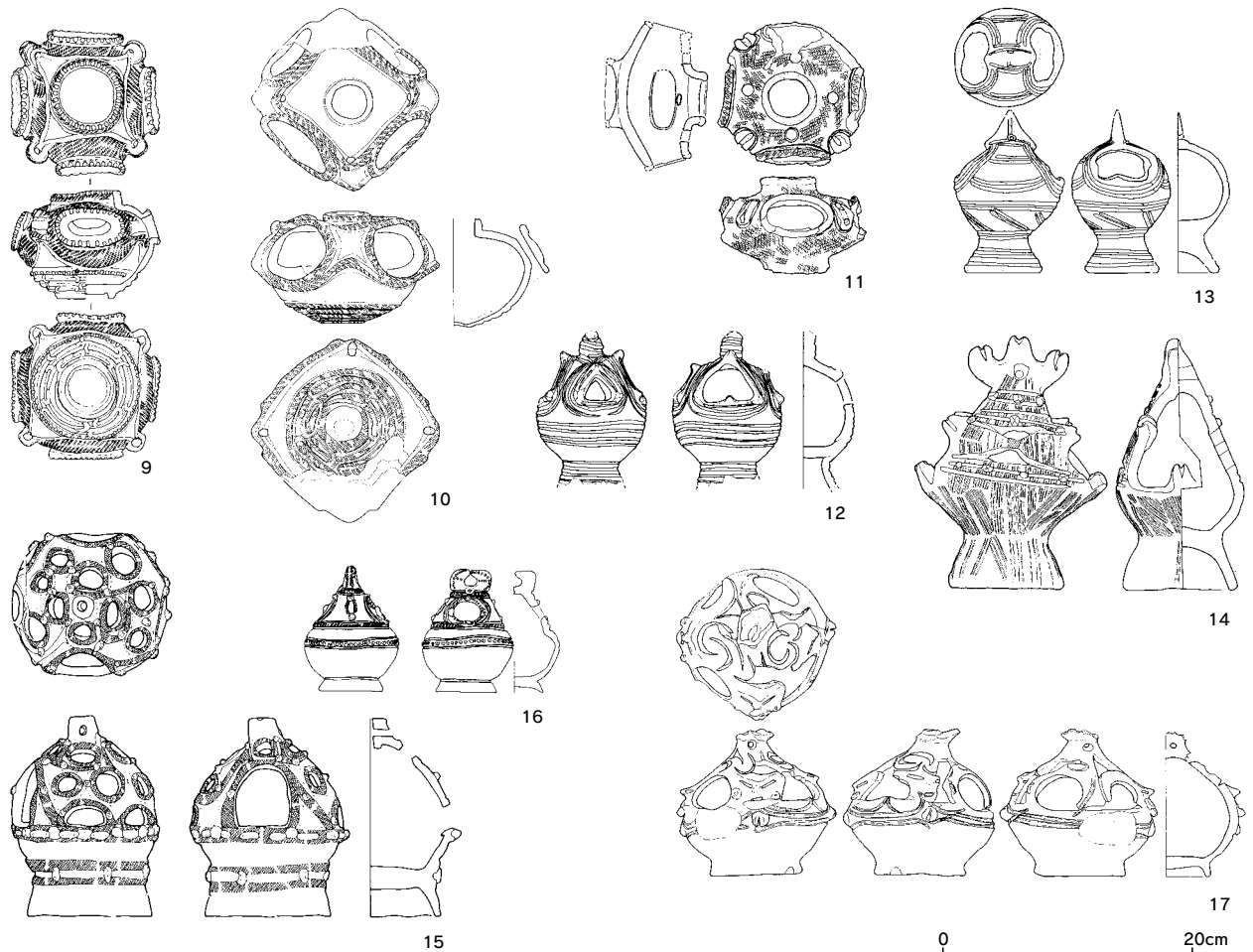


図1 千葉県域で出土した異形土器

1: 吉見台遺跡(佐倉市) 2・3: 加曾利貝塚(千葉市) 4・6・7: 三直貝塚(君津市) 5: 貝の花遺跡(松戸市)
 8: 井野長割遺跡(佐倉市) 9・11: 祇園原貝塚(市原市) 10: 西広貝塚(市原市) 12: 多古田低地遺跡(多古町)



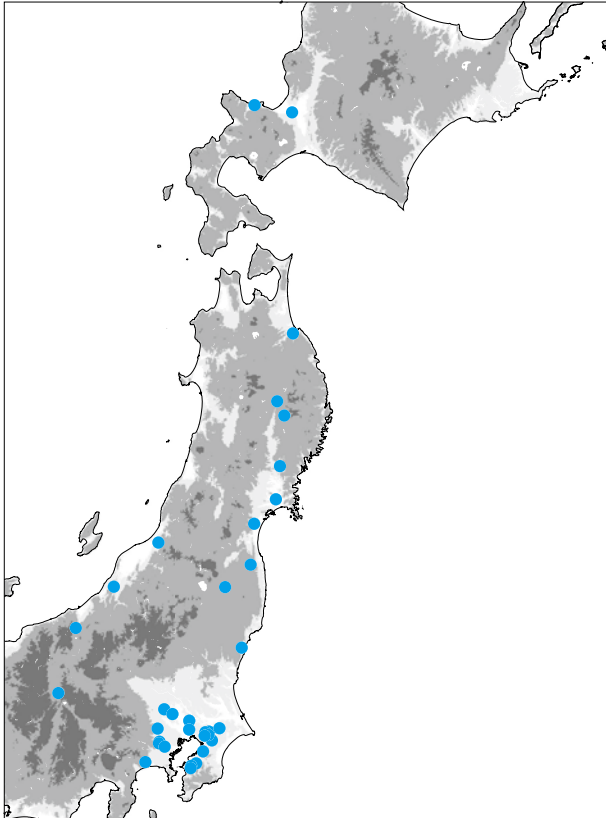
異形台付土器



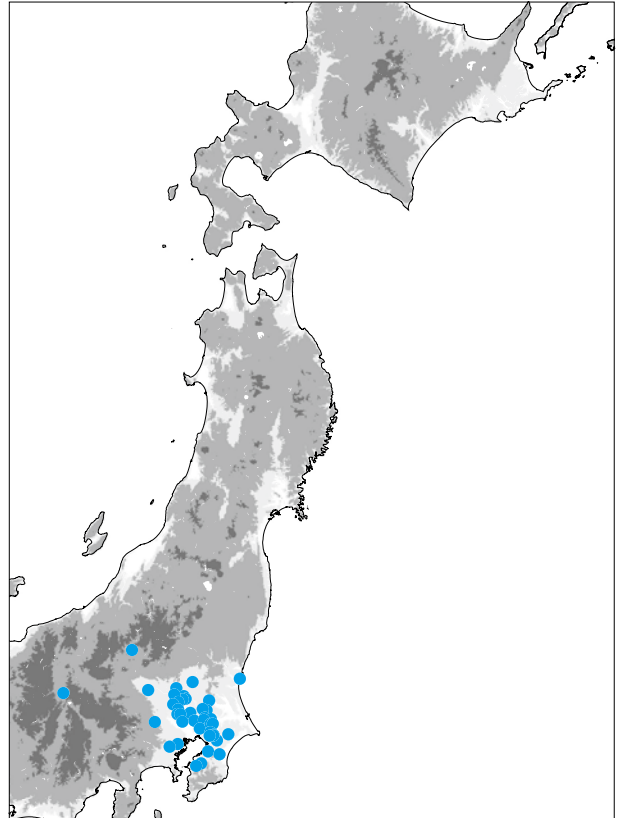
釣手/香炉形土器

図2 北海道・東北で出土した異形土器

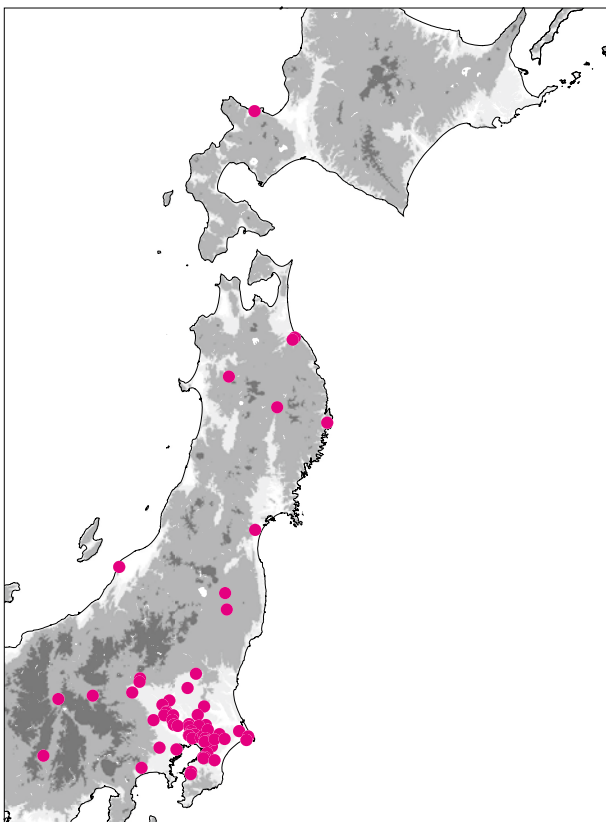
- 1・9：忍路土場遺跡(北海道) 2：丹後谷地(1)(2)遺跡(青森) 3・13：漆下遺跡(秋田) 4：椀の木遺跡(岩手)
 5：立石遺跡(岩手) 6：風張(1)遺跡(青森) 7：野田生1遺跡(北海道) 8：水木沢遺跡(青森) 10：酒美平遺跡(青森)
 11：松ヶ平D遺跡(福島) 12：ヲフキ遺跡(秋田) 14：宝ヶ峯遺跡(宮城) 15：大湊近川遺跡(青森)
 16：大日向II遺跡(岩手) 17：川原平(1)遺跡(青森)



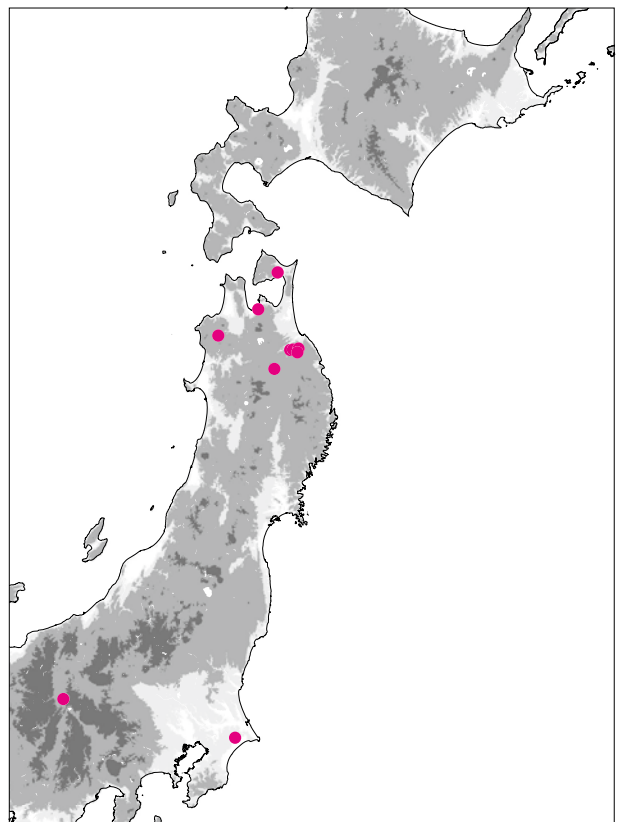
異形台付土器の分布状況（縄文時代後期中ごろ）



異形台付土器の分布状況（縄文時代後期の終わりごろ）



釣手／香炉形土器の分布状況（縄文時代後期中ごろ）



釣手／香炉形土器の分布状況（縄文時代後期の終わりごろ）

図3 異形土器分布の変遷

ところが、加曽利B2式期になると、関東西部と関東東部とでは形や文様がかなり異なる土器が作られるようになり、地域差が生じてきます(図4-4・5)。同じころ、北海道・東北の広い範囲でよく似た土器が作られるようになります。この時期の北海道・東北の土器には口の部分が無文で大きく波打つ形をしているものが多くなります(図4-6)。このような口の形を波状口縁と呼んでいます。このような波状口縁の土器は、関東東部の加曽利B2式土器にもみられ(図4-5)、東北の影響を受けていることがわかります。このような状況から、関東の土器に生じた地域差は、東北の影響を受けた関東東部と、そうではなかった関東西部との差であると判断することができます。

なお、加曽利B1式土器は仙台湾あたりまで北に広がりましたが、加曽利B2式土器は東北ではほとんど出土しません。関東→東北という方向での土器の拡散がなくなり、東北→関東という方向の影響が強まったようです。

以上のように、関東と東北の関係は加曽利B2式期に大きく変化したことがわかります。2種類の異形土器はこのような地域間関係の変化の中で出現し、広域に展開したのです。

おわりに

異形土器の出現・展開は、縄文時代後期の中ごろに起こった地域間関係の変化と連動していると考えられます。変化の範囲は東日本にとどまらない可能性があります。最近、鳥根県出雲市の京田遺跡では異形台付土器によく似た破片が報告されています。しかも、その破片に付着した赤色顔料の水銀朱は北海道産である可能性が指摘されています。今回は東日本を対象に分析しましたが、今後は西日本にも分布が広がっている可能性を念頭に研究していかなければなりません。

実は、同じころの西日本でも地域間関係に大きな変化が起こっていることが近年の研究で指摘されており、列島全体を巻き込む大きな社会的変化が起こったことが明らかになりつつあります。異形土器のような広域分布する資料を手がかりにして、より大きな視野で地域関係の変化をとらえていくことが今後の課題となります。

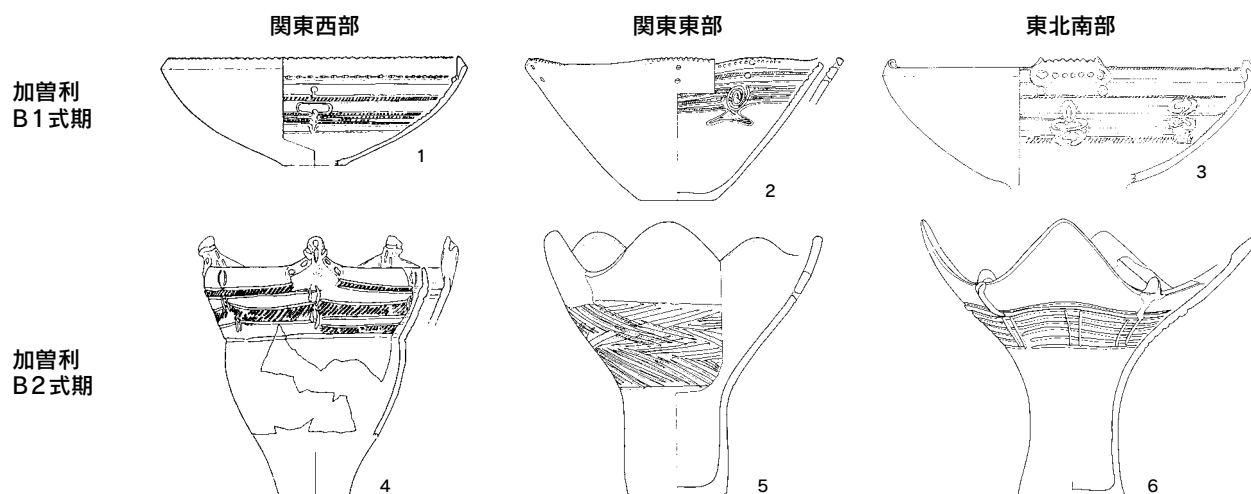


図4 関東・東北における縄文時代後期中ごろの土器

1・4：王子ノ台遺跡(神奈川) 2・5：西根遺跡(千葉) 3：片符沢遺跡 6：宮畑遺跡(福島)

令和3年度出土遺物公開事業
らくがく縄文館
—縄文土器のマナビを楽しむ—
講演会講演要旨

令和4年1月22日 発行

編集・発行 公益財団法人 千葉県教育振興財団
〒284-0003 四街道市鹿渡809番地の2
TEL. 043 (424) 4850
印刷 株式会社エリート情報社 [印刷出版局]



公益財団法人
千葉県教育振興財団